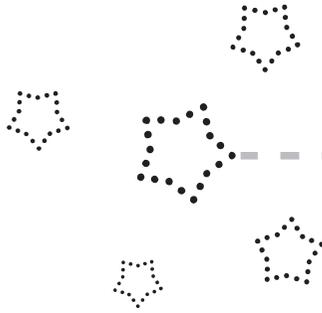


第1部 全体の調査結果

第1章

子どもとのかかわり

櫻井 茂男



しっかりしつけたいという「しつけ重視」の態度が強まっている。専業主婦の母親は基本的な生活習慣の確立を、パートやフリーの母親は子どもの自立を、常勤の母親は温かい家庭の形成を、それぞれ重視している。

●生活リズムの形成とゲーム遊びの規制が重要

家庭でのしつけや教育方針についてたずねた。「あなたのご家庭ではお子様を育てていく上で、とくに心がけていることがありますか」と問い、家庭でのしつけや教育方針を示した19（「その他」を含む）の項目に、複数回答してもらった。このような調査は3回目であり、各回（1997年、2003年、2008年〔今回〕）の各項目に対する選択率と、97年調査から08年調査までの変化を、図1-1-1に示した。

まず、03年調査と08年調査の結果に基づき、5年間の変化をまとめてみよう。08年調査の選択率をみると、第1位が「基本的なあいさつやお礼ができるようにしつけている」（87.8%）、第2位が「一人でできることは、できるだけ自分でさせるようにしている」（73.8%）、第3位が「友だちと仲よくするように教えている」（73.5%）で、この順位は03年調査の結果と同じである。大切に思い、いつも心がけているしつけには変化がないといえよう。

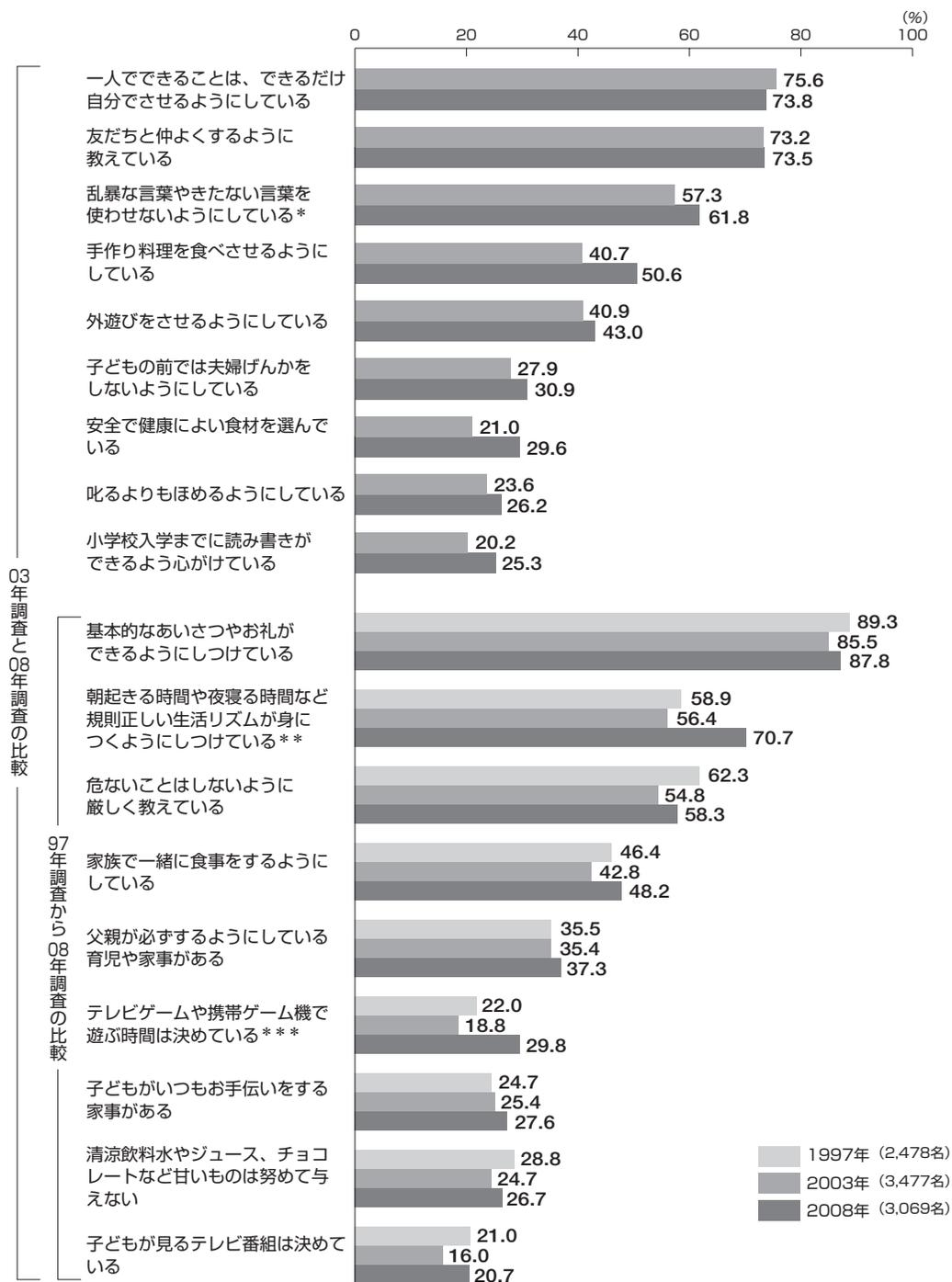
次に、この間の変化を項目ごとにみると、「一人でできることは、できるだけ自分でさせるようにしている」以外はすべて高くなっている。この5年間に、家庭でのしつけに対する母親の意識は高まったものと思われる。もっとも増加の大きかった項目は「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけている」（03年調査56.4%→08年調査70.7%、以下同）で14.3ポ

イント増加した。基本的な生活リズムをしつけることに、とくに注意が払われるようになったといえる。次に増加が大きかったのは「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」（18.8%→29.8%）で11.0ポイント増加した。児童期以降に大きな問題となるゲーム遊びについて、幼児期からしつけることの重要性が認識されるようになったものと思われる。

●この11年間でしつけの重要性が復活

97年調査から03年調査を経て08年調査に至る11年間の変化をみてみよう。3回の調査で共通している項目は「その他」を除くと9項目である。この9項目の選択率の変化をみると、97年調査から03年調査で多少減少し（「子どもがいつもお手伝いをする家事がある」を除く）、03年調査から08年調査で増加する。この5年間に、家庭でのしつけに対する重要性が再認識され、97年調査当時のレベル以上に、その重要性が認識されたものと思われる。97年調査から03年調査への選択率の減少と03年調査から08年調査への選択率の増加を比較すると、増加のほうが大きい項目は9項目中5項目である。その中でも、「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけている」と「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」の2項目は、とくに増加しており、この2つは、近年重要度がとくに増したしつけといえよう。

図1-1-1 家庭でのしつけや教育方針（経年比較）



03年調査と08年調査の比較

97年調査から08年調査の比較

注1) 複数回答。「その他」を除く18項目を図示した。

注2) *は03年調査では「乱暴な言葉やきたない言葉を使わないようにさせている」。

**は03年調査では「朝起きる時間や夜寝る時間など生活リズムは規則正しくしつけている」。

***は97年調査では「テレビゲーム（ファミコン）で遊ぶ時間は決めている」、03年調査では「テレビゲームで遊ぶ時間は決めている」。

注3) 03年調査と08年調査のデータのみ示されている9項目は、97年調査は該当項目なし。

● 成長に伴うしつけの違いが明白

家庭でのしつけや教育方針に関するデータを、年少児、年中児、年長児の3つの時期に分けて、グラフ化したものが図1-1-2に示されている。

3つの時期のいずれかの間に、3ポイント以上の違いがある項目を取りあげ、①上昇型、②下降型、③U字型、④逆U字型に分類した。また、これらに該当しない項目は、3つの時期を通して選択率が一定で、安定したしつけ項目である（安定型）。これに属する選択率の高い（45%以上）項目は、「基本的なあいさつやお礼ができるようにしつけている」「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけている」「乱暴な言葉やきたない言葉を使わせないようにしている」「家族で一緒に食事をするようにしている」で、基本的な生活習慣の形成に関する項目である。

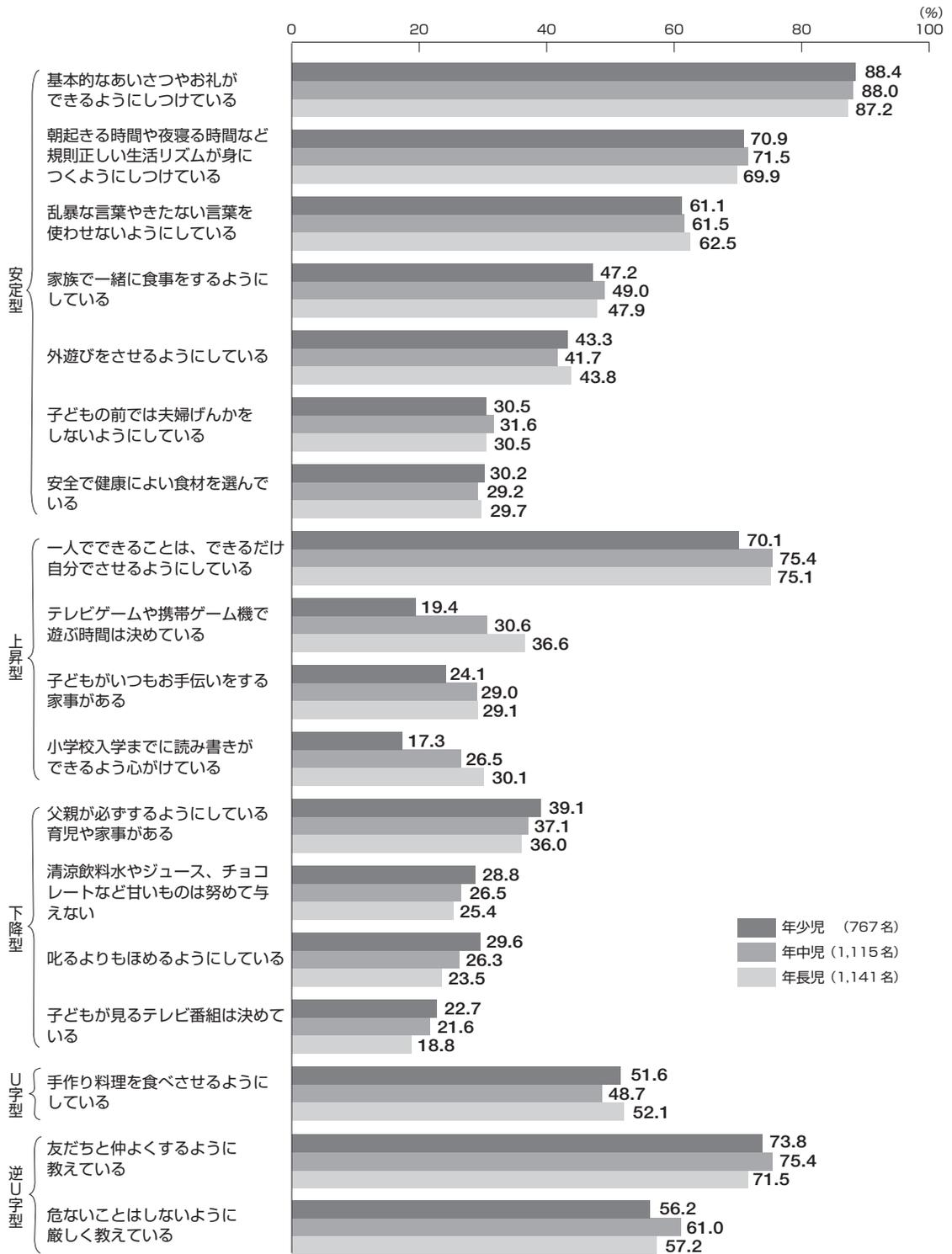
上昇型は「一人でできることは、できるだけ自分でさせるようしている」「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」「子どもがいつもお手伝いをする家事がある」「小学校入学までに読み書きができるよう心がけている」の4項目である。これらは自立

を促し、ゲーム遊びを制限し、お手伝いを奨励し、小学校入学に備えさせるといった子どもの成長とともに重要度が増すしつけといえよう。

下降型は「父親が必ずするようにしている育兒や家事がある」「清涼飲料水やジュース、チョコレートなど甘いものは努めて与えない」「叱るよりもほめるようにしている」「子どもが見るテレビ番組は決めている」の4項目である。これらの項目のうちとくに、「清涼飲料水やジュース、チョコレートなど甘いものは努めて与えない」「子どもが見るテレビ番組は決めている」は、成長とともにしつける必要がなくなってきた項目というよりも、しつけることが難しくなってきた項目であるように思われる。

U字型は「手作り料理を食べさせるようにしている」、逆U字型は「友だちと仲よくするように教えている」「危ないことはしないように厳しく教えている」である。逆U字型の2項目は、年中児の時期にとくに必要とされるしつけと思われる。この時期は、友だち遊びが大事（盛ん）になり、友だち遊びの中で危ないことも起こりやすい時期である。

図 1-1-2 家庭でのしつけや教育方針（学年別）



注) 複数回答。「その他」を除く18項目を図示した。

● **専業主婦は基本的な生活習慣を、
常勤の母親は家族での食事を重視**

家庭でのしつけや教育方針に関するデータを、母親の就業状況によって、専業主婦、パートやフリー、常勤の3つに分け、グラフ化したものが図1-1-3に示されている。3ポイント以上の違いを基準に、特徴をみてみた。

専業主婦の母親で比率が高いのは、「基本的なあいさつやお礼ができるようにしつけている」「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけている」「外遊びをさせるようにしている」「父親が必ずするようにしている育児や家事がある」「子どもが見るテレビ番組は決めている」の5項目であり、おもに基本的な生活習慣をしつけようとする意図が感じられる。

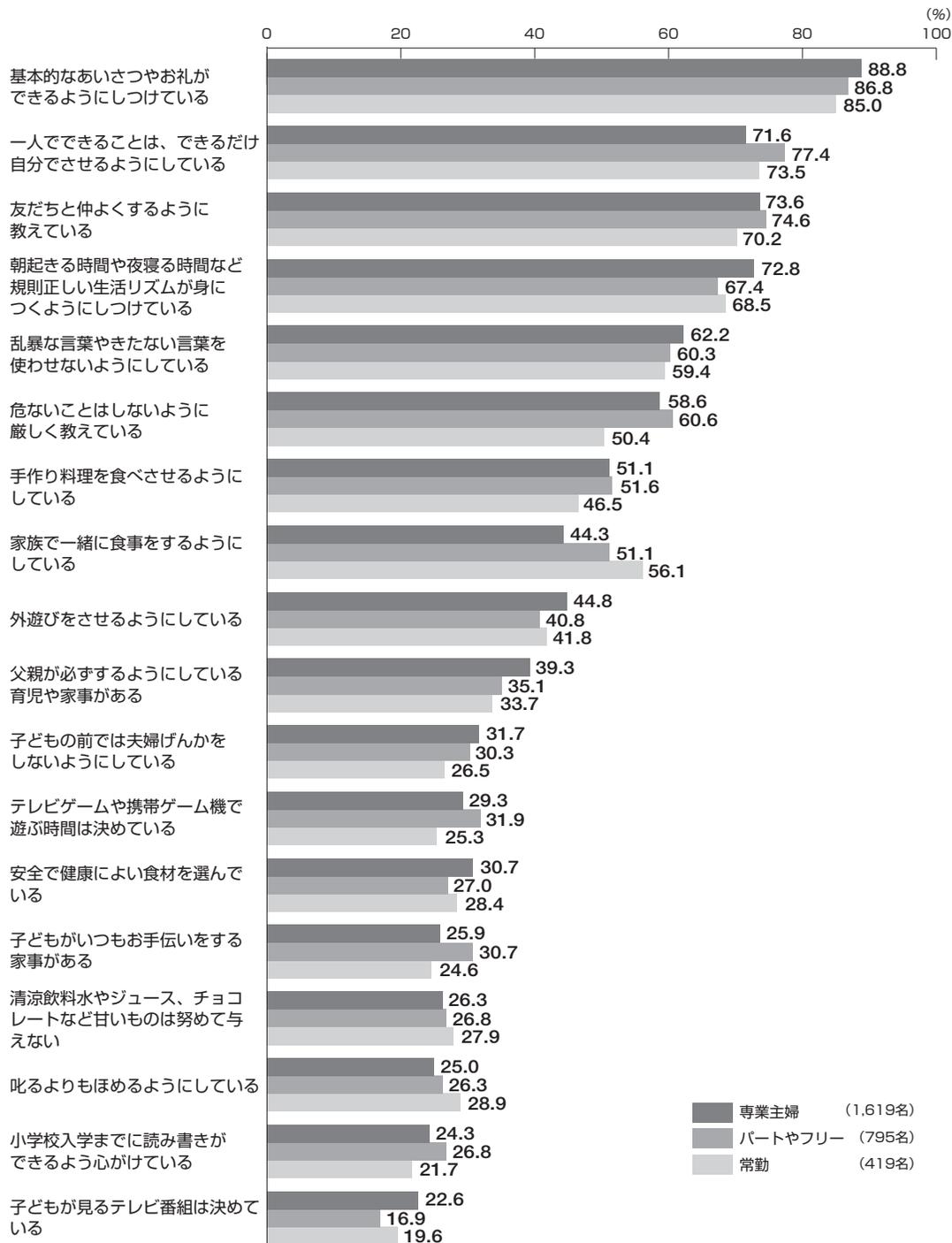
パートやフリーの母親で比率が高いのは「一人でできることは、できるだけ自分でさ

せるようにしている」「子どもがいつもお手伝いをする家事がある」の2項目であり、子どもの自立を促そうという意図が感じられる。

常勤の母親で比率が高いのは、「家族と一緒に食事をするようにしている」と「叱るよりもほめるようにしている」の2項目であり、温かい家庭を作ろうという意図が感じられる。

なお、専業主婦とパートやフリーの母親ともに高い項目が6項目（「友だちと仲よくするように教えている」「危ないことはしないように厳しく教えている」「手作り料理を食べさせるようにしている」「子どもの前では夫婦げんかをしないようにしている」「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」「小学校入学までに読み書きができるよう心がけている」）あり、これも大きな特徴の1つといえよう。

図1-1-3 家庭でのしつけや教育方針（母親の就業状況別）



注) 複数回答。「その他」を除く18項目を図示した。

母親の子どもとのかかわりは5年前とほとんど変わらない。働く母親ほど、また夫の理解や協力が得られる母親ほど、子どもに肯定的にかかわっている。第1子へは否定的なかかわりをしやすい傾向がみられる。

● 子どもとの肯定的なかかわりが多い

日ごろの子どもとのかかわりやその中で感じていること（日ごろの生活であること）についてたずねた。「あなたは日ごろの生活の中で、次のようなことがどれくらいありますか」と問い、13の項目に、「よくある」「時々ある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4段階で回答してもらった。回答結果は図1-1-4に示されている。

まず、母親の肯定的な行動や感情についてみてみよう。「園の参観日や運動会などの行事に参加する」「子どもが成長したと感じる」「子どもと一緒に買い物に出かける」「子どもが思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる」「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」の5項目では、「よくある」と「時々ある」の回答を合計すると90%程度以上となり、母親が子どもに対して肯定的にかかわっていることがわかる。

一方、母親の否定的な行動や感情についてはどうだろうか。「子どもを感情的に叱ってしまう」「子どもの態度にイライラする」の2項目は、「よくある」が20%を超え、「時々ある」を含めると80%を超える。「子どもの様子を見ていると、つい不安になることがある」「子どもを思わずたたいてしまう」も、「よくある」と「時々ある」の合計ではそれぞれ60.7%、47.0%にのぼるため、子どもに対する否定的な行動や感情も、必ずしも少ないとはいえない。

● 第1子への育児に注意

子どもに対する否定的な行動や感情に関する項目について、「よくある」と「時々ある」を合計した割合を、学年別および出生順位別に検討した結果が図1-1-5、6に示されている。

まず、学年別にみると、学年間に大きな差異はみられない（図1-1-5）。03年調査の分析では「子どもの様子を見ていると、つい不安になることがある」「子どもが話しかけてきても相手にしない」「子どもをよその子と比べて落ち込む」の3項目に、学年が上がるにつれて高くなる傾向がみられた。しかし、今回はそのような結果はみられない。むしろ全体的にみると、年中児に対する否定的な行動や感情が多いようである。

次に、出生順位別にみると、否定的な行動や感情は、第1子のほうが第2子以降の子どもよりも多い（図1-1-6）。とくに、「子どもの態度にイライラする」「子どもの様子を見ていると、つい不安になることがある」といった感情面の項目で差が大きい。ただ、「子どもを感情的に叱ってしまう」「子どもを思わずたたいてしまう」といった行動面の項目で差が小さいため、母親の否定的な感情がそのまま子どもへの否定的な行動には結びついていないようである。母親にとって第1子の育児は、わからないことづくめであり、育児不安を解消するためのサポートが必要であると思われる。

図 1-1-4 日ごろの生活であること

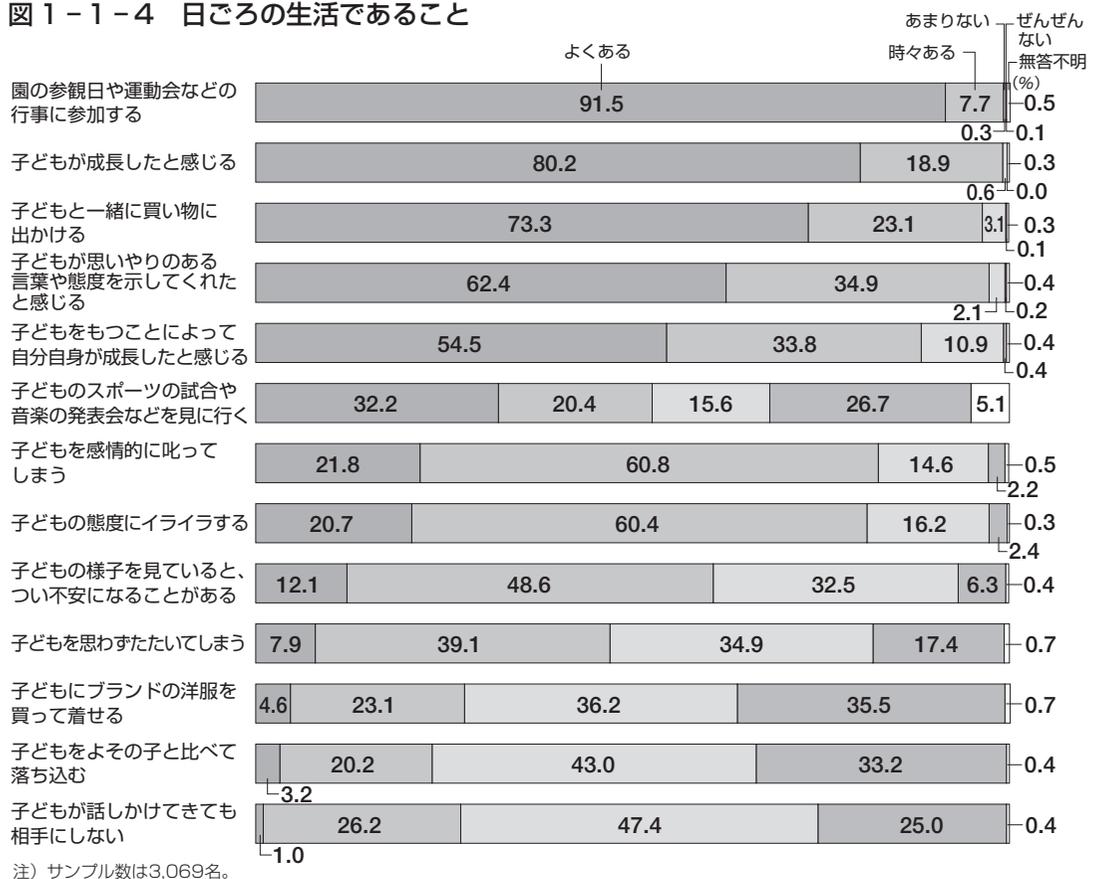
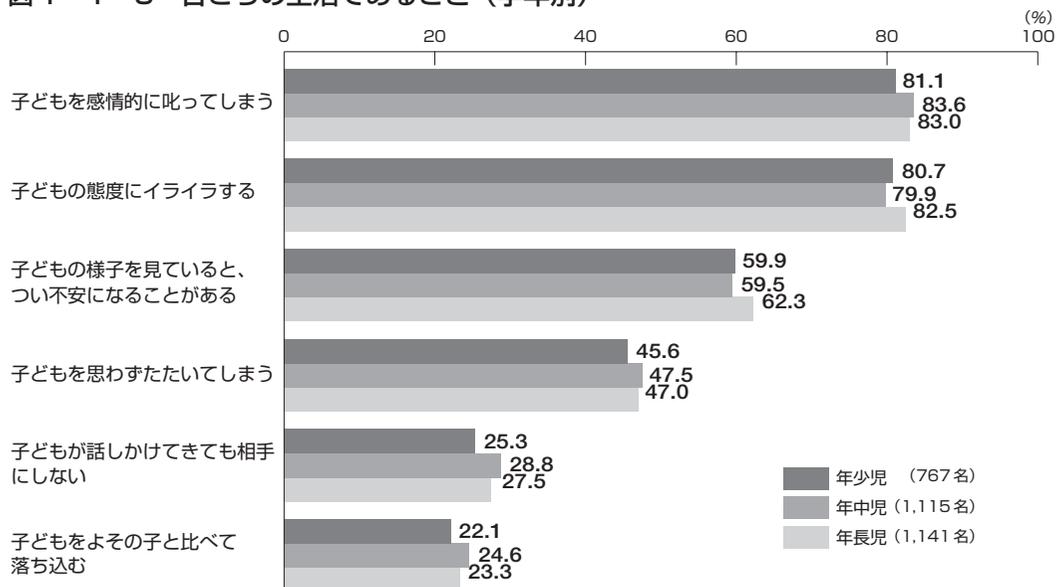
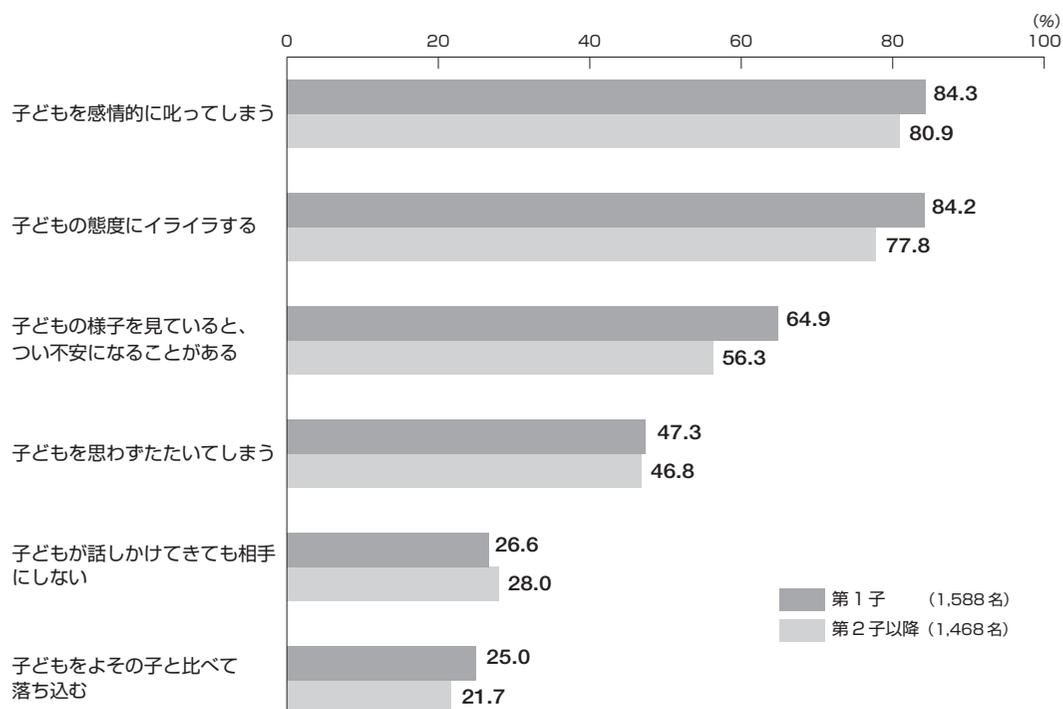


図 1-1-5 日ごろの生活であること (学年別)



注 1) 13 項目のうち、6 項目を図示した。
 注 2) 数値は「よくある」+「時々ある」の%。

図 1-1-6 日ごろの生活であること（出生順位別）



注1) 13項目のうち、6項目を图示した。
 注2) 数値は「よくある」+「時々ある」の%。

●働いている母親ほど子どもと肯定的にかかわる

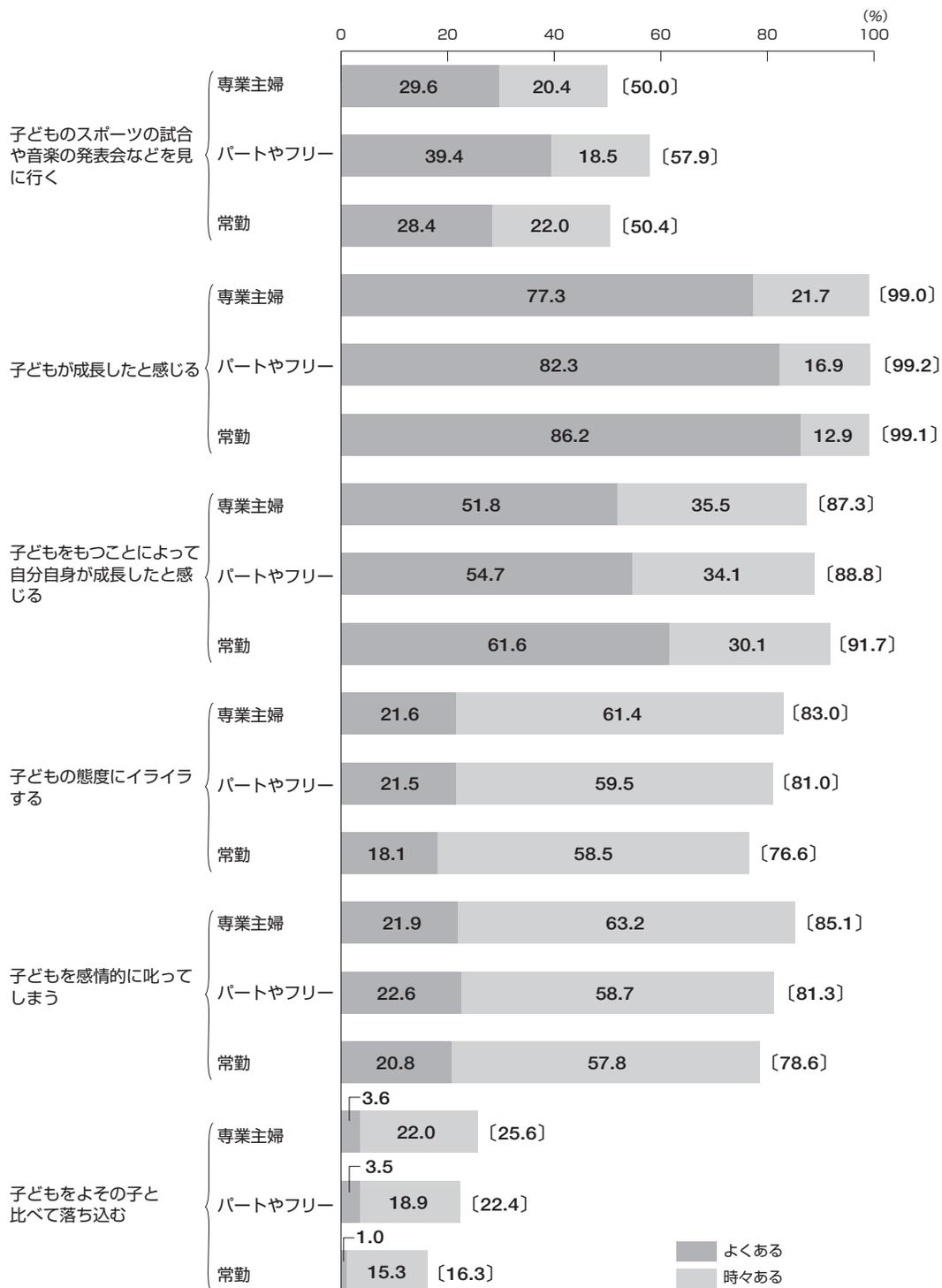
日ごろの生活であることに関するデータを、母親の就業状況別に整理し、特徴的な6項目の結果を図1-1-7に示した。上の3項目が肯定的な行動や感情、下の3項目が否定的な行動や感情である。

まず、肯定的な行動と感情についてみてみよう。「子どものスポーツの試合や音楽の発表会などを見に行く」という項目では、「よくある」と回答した割合は、専業主婦や常勤の母親よりも、パートやフリーの母親のほうが高い(39.4%)。「時々ある」の割合を含めると、パートやフリーの母親のほうが高くなっている。パートやフリーの仕事に就いている母親は、こうした子どもの行事に積極的にかかわっているといえよう。「子どもが成長したと感じる」と「子どもをもつことによ

て自分自身が成長したと感じる」という項目では、「よくある」と回答した割合は、専業主婦→パートやフリー→常勤の順序で増加している。働いている母親ほど、子どもの成長や自分の成長を感じやすいといえる。

否定的な行動や感情についてはどうだろうか。「よくある」と回答した割合をみると、「子どもの態度にイライラする」という項目でのみ、常勤の母親は専業主婦や、パートやフリーの母親よりも低いという傾向がみられた。「よくある」と「時々ある」を合計した割合でみると、「子どもの態度にイライラする」「子どもを感情的に叱ってしまう」「子どもをよその子と比べて落ち込む」といった3項目では、専業主婦→パートやフリー→常勤の順序で減少している。否定的な行動や感情は、働いている母親ほど、少ないといえる。

図 1-1-7 日ごろの生活であること（母親の就業状況別）



注1) 13項目のうち、6項目を図示した。

注2) [] 内の数値は、「よくある」+「時々ある」の%。

注3) サンプル数は専業主婦1,619名、パートやフリー795名、常勤419名。

● 育児には夫の理解・協力が不可欠

子どもに対する否定的な行動や感情をたずねる6項目について、「あなたの配偶者は、あなたが関心をもっていることや悩みなど『現在のあなたご自身』を理解してくれていると思いますか」という質問とクロスさせて分析を行った。「よく理解している」と回答した母親群と「ぜんぜん理解していない」と回答した母親群に分けて、両群を比較してみた。結果は図1-1-8に示されている。また、「あなたの配偶者は、子育てに協力的だと思いますか」という質問とクロスさせた分析もほぼ同様の結果であった。

一般に、夫（父親）から理解されている、あるいは夫が育児に協力的であると感じている妻（母親）は、そうでない妻（母親）よりも、わが子に対して否定的な行動をしたり否定的な感情をもったりすることは少ないと予想される。分析の結果（図1-1-8）はこの考えを強く支持している。

両群には、12.4ポイント（「子どもをよその子と比べて落ち込む」）～20.1ポイント（「子どもが話しかけてきても相手にしない」という大きな差がみられる。もっとも大きな

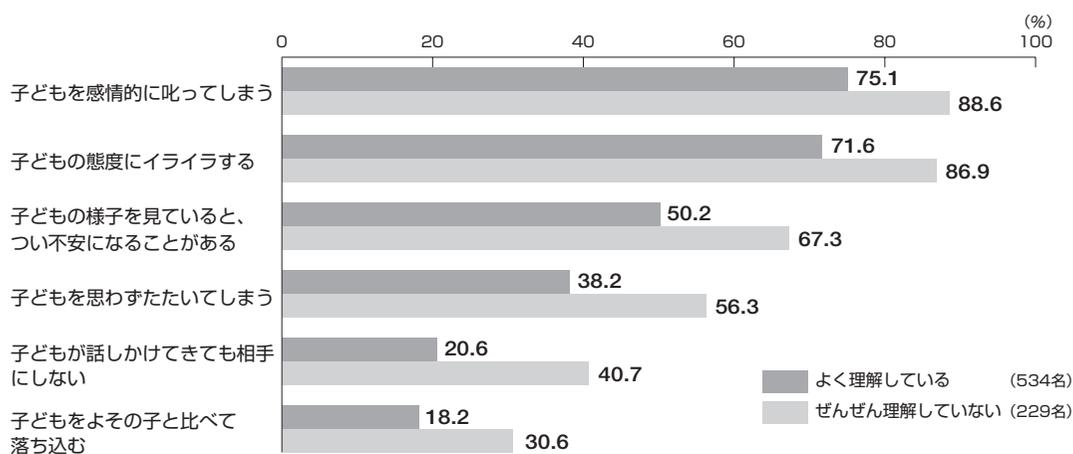
差がみられた「子どもが話しかけてきても相手にしない」という行動はいわゆる「無視」であり、場合によっては、感情的に叱ることよりも不適切な行動であるといわれる。この項目にこれだけの差があることに注意が必要である。また、否定的な感情（イライラ、不安、落ち込みの3項目）よりも、子どもに対する否定的な行動（たたく、相手にしないの2項目）で差が大きく、この点も問題である。

● 子どもとの生活に大きな変化はない

日ごろの生活であることに関する項目について、各項目に「よくある」または「時々ある」と回答した割合を算出し、03年調査と08年調査を経年比較した。結果は図1-1-9に示されている。3ポイント以上の違いを基準に、5年間の変化をみた。

「よくある」と「時々ある」の合計の値で比較すると、13項目のうち12項目に変化はみられなかった。変化があったのは「子どもにブランドの洋服を買って着せる」という1項目で、5.0ポイントの減少が認められた。この5年間で堅実なしつけ志向が強まったように思われる。

図1-1-8 日ごろの生活であること（配偶者の理解度別）



注1) 13項目のうち、6項目を図示した。

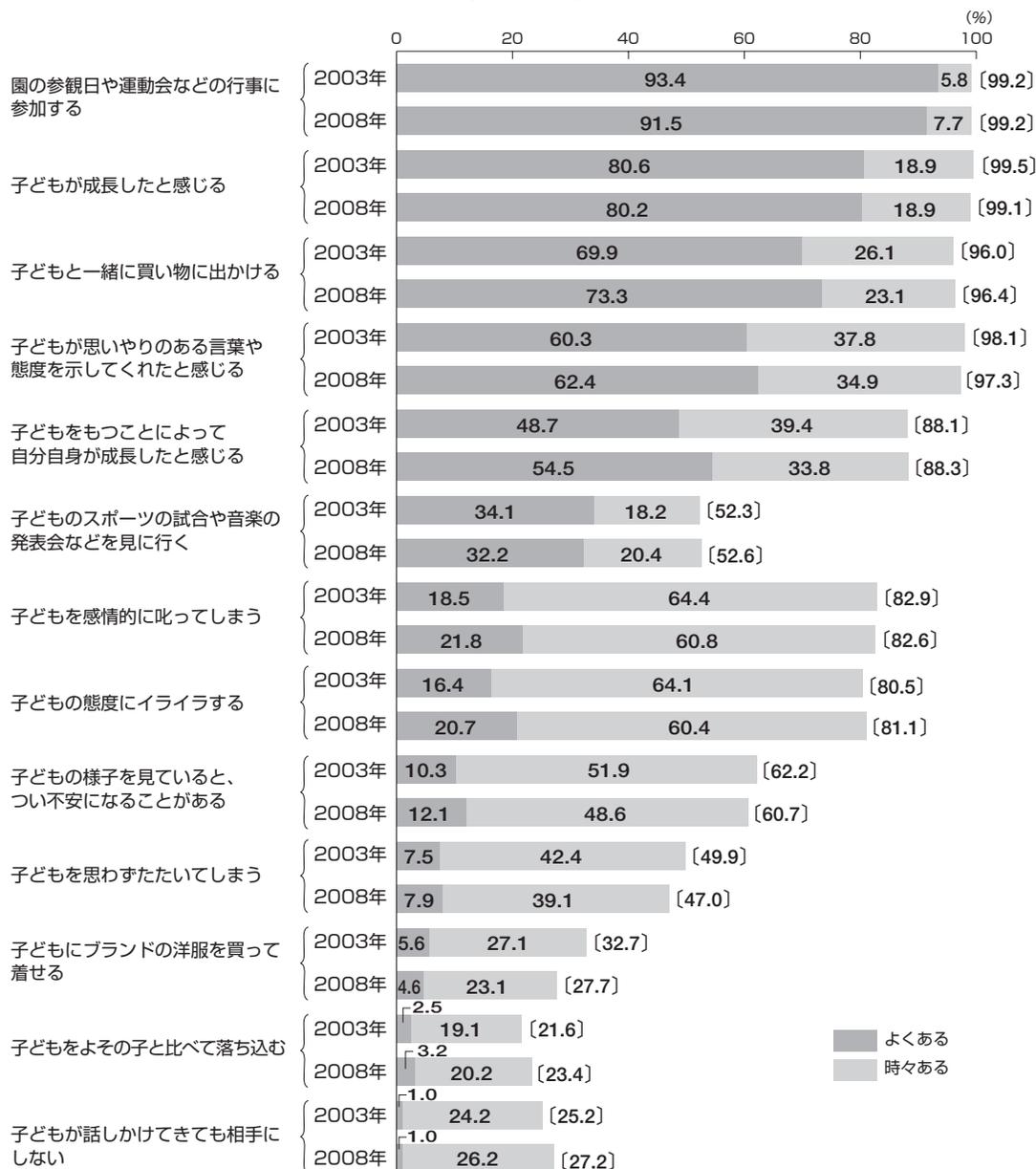
注2) 数値は「よくある」+「時々ある」の%。

注3) 「あなたの配偶者は、あなたが関心をもっていることや悩みなど『現在のあなたご自身』を理解してくれていると思いますか」の5段階の回答のうち、「よく理解している」「ぜんぜん理解していない」という2つの回答について示した。

なお、「よくある」と回答した母親の割合を比べると、「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」(5.8ポイント増)、「子どもの態度にイライラする」(4.3ポイント増)、「子どもと一緒に買い物に出かける」(3.4ポイント増)、「子どもを感情的に叱って

しまう」(3.3ポイント増)という項目に増加傾向が認められた。自分が成長したとよく感じ、子どもと一緒によく買い物にも出かけるものの、子どもにイライラしたり感情的に叱ったりすることも多い、チグハグしたわだかまった母親像が浮かんでくる。

図 1-1-9 日ごろの生活であること (経年比較)



注1) [] 内の数値は、「よくある」+「時々ある」の%。
 注2) サンプル数は2003年3,477名、2008年3,069名。

第3節

子どもと一緒にすること

しつけの重視（第1節）に対応するように、「ひらがなやカタカナの学習」や「数や算数の学習」をする機会は増えている。一方、費用がかかると思われる「パソコンを使つての遊びや学習」は減っている。

●子どもとのコミュニケーションは良好

母親が家庭内で子どもとすることを、早期教育にかかわることも含めてたずねた。「あなたのご家庭では、お子様と次のようなことをどれくらいしますか」と問い、母親が家庭で子どもとしていると予想される12の項目に、5段階（「ほとんど毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」「月に1～3日」「ほとんどない」）で回答してもらった。結果は図1-1-10に示されている。

「ほとんど毎日」という回答をみると、「子どもと一緒に話をする」が94.7%とほぼ全員であり、「子どもに一日の出来事を聞く」も84.9%とかなり高かった。この2項目が高いということは、家庭での子どもとのコミュニケーションが良好であることを示している。

次に50%程度の項目は、「テレビの幼児向け教育番組を見せる」「子どもと一緒に遊ぶ」「家族みんなで食事をする」である。一昔前は多かったであろう「子どもに家事を手伝わせる」は26.0%である。これらに比べて、「ひらがなやカタカナの学習をする」「数や算数の学習をする」「英語のビデオ教材を見せたり、CD教材を聞かせたりする」「パソコンを使って遊んだり、学習したりする」は、「週に3～4日」を含めても22.1%以下であるが、学習活動としては結構多いように思われる。

●文字や数の学習時間が増えた

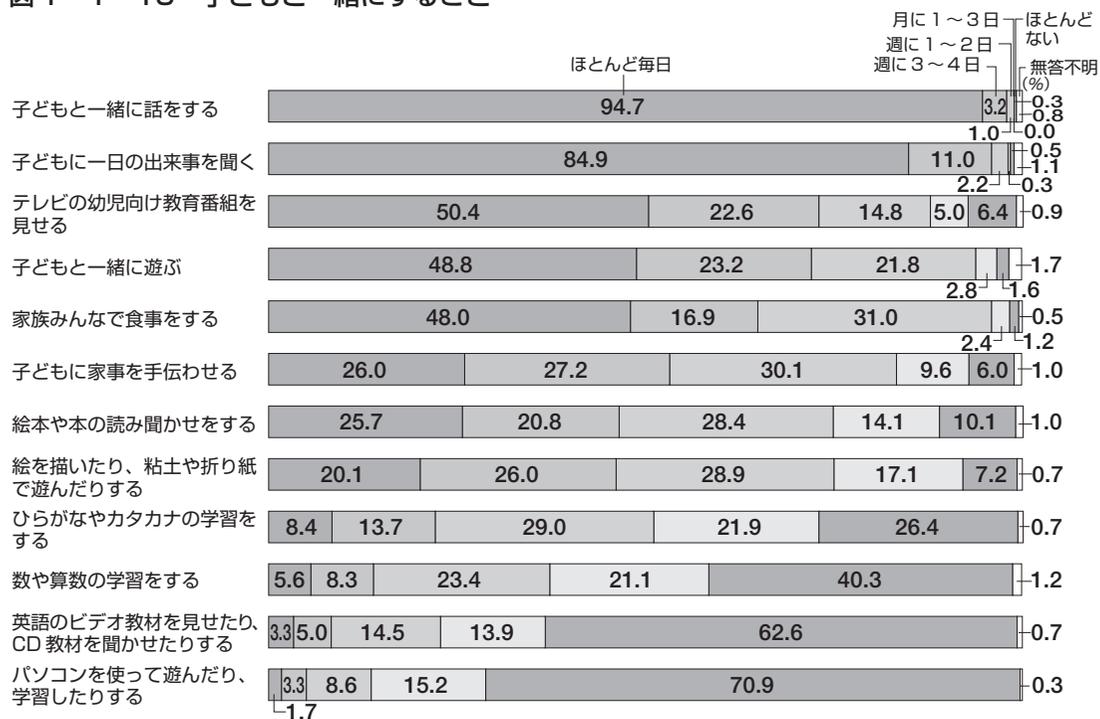
母親が子どもとすることに関するデータを、以下の方法で数値化した。「ほとんど毎

日」は7日、「週に3～4日」は3.5日、「週に1～2日」は1.5日、「月に1～3日」は0.5日、「ほとんどない」は0日として、週あたりの平均日数を求めた。03年調査と08年調査のデータを用いて、図1-1-11を作成した。なお、これ以降は0.2日以上の差を基準にして考察する。

まず、2回の調査に共通する傾向をみると、家庭でもっともよくみられるのは、「子どもと一緒に話をする」（週に6.8日）でほぼ毎日、次が「子どもに一日の出来事を聞く」（03年調査6.3日、08年調査6.4日）で週に6日くらいである。

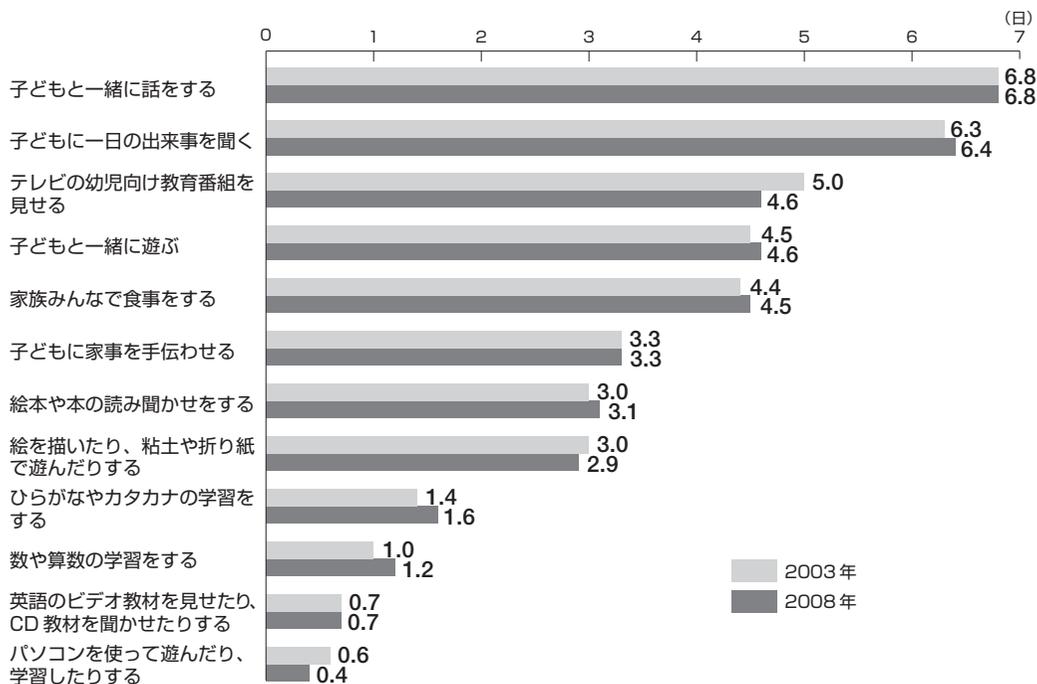
経年比較では、12項目中4項目に増減が認められた。08年調査に増加したのは、「ひらがなやカタカナの学習をする」（03年調査1.4日→08年調査1.6日、以下同）と「数や算数の学習をする」（1.0日→1.2日）である。一方、減少したのは、「テレビの幼児向け教育番組を見せる」（5.0日→4.6日）と「パソコンを使って遊んだり、学習したりする」（0.6日→0.4日）である。この4項目はいずれも子どもの学習に関する項目であるが、増加したのは、小学校に入っただけで役に立つような文字や数の学習時間である。一方、減少したのは、どちらかといえば、何に役立つかはっきりしない（目的がはっきりしない）教育番組を見る時間や、かなりの費用がかかるパソコンでの学習の時間である。直接的な効果が期待でき、あまり費用のかからない学習の時間が増えているように思われる。

図1-1-10 子どもと一緒にすること



注) サンプル数は3,069名。

図1-1-11 子どもと一緒にすること(経年比較)



注) 「ほとんど毎日」を7日、「週に3~4日」を3.5日、「週に1~2日」を1.5日、「月に1~3日」を0.5日、「ほとんどない」を0日として週あたりの平均日数を算出した。全体のサンプル数は2003年3,477名、2008年3,069名であり、無答不明は分析から除外した。

●子どもの成長に合わせて教えている

母親が子どもと一緒にすることを、学年別に検討した結果が図1-1-12に示されている。分析の方法は図1-1-11と同じである。子どもの成長に伴って、どのようなことが増えたり減ったりするのであろうか。

まず、増えるものであるが、年少児から年長児にかけて段階的に増えるのは、「ひらがなやカタカナの学習をする」(年少児1.2日→年中児1.7日→年長児1.9日、以下同)と「数や算数の学習をする」(0.9日→1.1日→1.4日)である。文字の学習時間(日数)は年少児から年中児での増加が大きく、数の学習時間(日数)は年中児から年長児での増加が大きい。これは発達段階的にみると、文字の学習がやや早く、次に数の勉強がくることを示している。

また、年少児と年中児の間に差があって増加傾向といえるのは「子どもに家事を手伝わせる」と「絵を描いたり、粘土や折り紙で遊

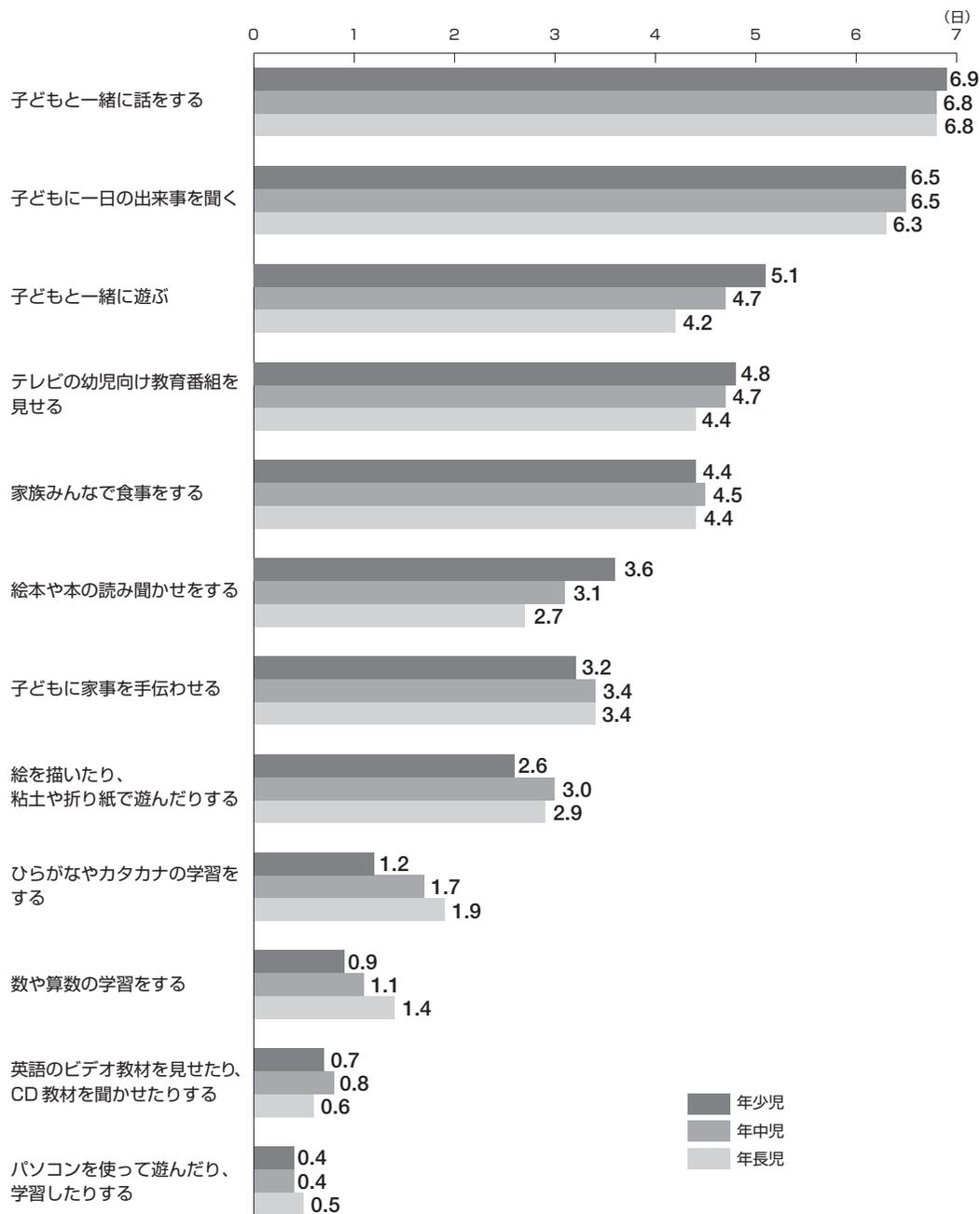
んだりする」である。これらは年中児くらいから盛んになるものといえよう。

次に、減るものであるが、年少児から年長児にかけて段階的に減るのは、「子どもと一緒に遊ぶ」(5.1日→4.7日→4.2日)と「絵本や本の読み聞かせをする」(3.6日→3.1日→2.7日)である。これらは、成長とともに母親にしてもらう必要がなくなるからであろう。

また、年中児と年長児の間に差があって減少傾向といえるのは「子どもに一日の出来事を聞く」「テレビの幼児向け教育番組を見せる」「英語のビデオ教材を見せたり、CD教材を聞かせたりする」である。これらは年中児くらいまで盛んなものといえる。

最後に「家族みんなで食事をする」(4.4日→4.5日→4.4日)や「子どもと一緒に話をする」(6.9日→6.8日→6.8日)にはほとんど変化がない。これらは、幼児にとっていつも大切なことだからであろう。

図 1-1-12 子どもと一緒にすること（学年別）



注) 「ほとんど毎日」を7日、「週に3～4日」を3.5日、「週に1～2日」を1.5日、「月に1～3日」を0.5日、「ほとんどない」を0日として週あたりの平均日数を算出した。全体のサンプル数は年少児767名、年中児1,115名、年長児1,141名であり、無答不明は分析から除外した。

子どもとのかかわりについて

—— 分析結果からみえること ——

第1節では、家庭でのしつけや教育方針、第2節では、日ごろの子どもとのかかわりやその中で感じていること、第3節では、母親が子どもと一緒にしていること（早期教育も含む）、について調査結果を紹介してきた。本節では、今回の分析でわかったことについてまとめて考察したい。

● 経年比較からわかること

今回（2008年）の調査を含め、これまでに合計3回、同様の枠組みで調査が行われた。それらの調査結果に基づき、経年比較を行った。

第1節の家庭でのしつけや教育方針については、97年調査、03年調査、そして今回（08年調査）の経年比較を行った。分析結果から明らかなことは、この5年の間（03年調査→08年調査）に、母親がしつけを重視する態度が明確になったということである。97年調査は、03年調査、08年調査と調査方法が異なり、また調査項目について追加・変更・削除があったため、正確な比較はできないが、それでも全体的な傾向としては、97年調査から03年調査にかけてしつけをあまり重視しない方向に動き、その後08年調査にかけてしつけをかなり重視する方向に動いたといえる。さらにいえば、08年調査におけるしつけ重視の傾向は97年調査以上のものである。

とくに重視されるようになったしつけとは、「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけている」と「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」である。前者は、規則正しい生活リズムを形成することであり、後者は、ゲームで遊ぶ時間を制限することである。子どもの生活のリズムは、テレビゲームや携帯ゲーム機の普及によってかなり乱されるよう

になったと思われる。その意味では、子どもの規則正しい生活リズムの形成が、もっとも重要視されるしつけであると考えられる。

第2節の日ごろの子どもとのかかわりやその中で感じていることは、比較できるデータは03年調査のもののみである。当該データと比べると、今回は大きな変化はみられなかった。第1節の家庭のしつけや教育方針と、第2節の母親の育児行動とがうまく対応していないため、態度の変化と行動の変化の対応状況を検討することはできなかった。しかし、この経年比較では、「子どもにブランドの洋服を買って着せる」という項目への肯定的な回答の減少が明らかになった。これはおそらく、しつけ重視の中でも堅実なしつけ志向が強くなっていることを示しているように思われる。

第3節の母親が子どもと一緒にすること（早期教育も含む）でも、03年調査と経年比較を行った。数値化をして比較した結果、「ひらがなやカタカナの学習をする」と「数や算数の学習をする」という項目に増加傾向がみられた。とくに、前者の文字の学習については、第1節の家庭のしつけや教育方針の中に「小学校入学までに読み書きができるよう心がけている」という項目があるため、それとの関係も検討できた。すなわち、この項目では03年調査から08年調査にかけて5.1%の選択率の上昇が認められるが、文字の学習も週に1.4日から1.6日という上昇が認められるのである。これは一例でしかないが、しつけ重視の態度は、それを現実のものとする育児行動に、しっかり反映されているものといえる。また、おそらくは数や算数の学習の増加も、しつけ重視の態度に基づくものと考えられる。ただ、しつけを重視する態度は、パソコンを使用する遊びや学習には反映される

ことがなく、実際には減少をもたらしていた。しつけ重視の態度は、第2節の経年比較の結果と同様に、あまりお金のかからない堅実な学習を促進しているように思われる。

● 学年別、出生順位別の分析から

わかること

学年別の分析とは、年少児、年中児、年長児の時期に分け、成長発達に伴ってどのような変化があるのかを分析することである。

第1節の家庭でのしつけや教育方針では、母親がそれぞれの時期に心がけるしつけは異なっていた。例えば、年少児では「清涼飲料水やジュース、チョコレートなど甘いものは努めて与えない」「叱るよりもほめるようにしている」「子どもが見るテレビ番組は決めている」、年中児では「友だちと仲よくするように教えている」「危ないことはしないように厳しく教えている」、年長児では「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」「小学校入学までに読み書きができるよう心がけている」を、それぞれ重視している。これはきわめて適切な心がけであるといえる。

第2節の日ごろの子どものかかわりやその中で感じていることでは、第1子の場合と第2子以降の場合とでまず比較した。その結果、子どもに対する否定的な行動（叱る、たたく）や母親の否定的な感情（イライラ、不安、落ち込む）では、第1子の場合のほうが多いことが明らかになった。第1子の場合、母親ははじめて育児を経験するため、よくわからなくてイライラしたり不安になったりすることが多く、その結果、子どもを叱ってしまうことも増えるのではないと思われる。周囲の人たちのサポートが必要である。次に、学年別の分析では、03年調査にみられた年長児への否定的な行動や感情が多い傾向がなくなり、年中児のほうに多い傾向（たとえば、「子どもが話しかけてきても相手にしない」）がみられた。これが今後の傾向となるのかどうか、引き続き調査を行い検討をしていく必要がある。

第3節の母親が子どもと一緒にしていること（早期教育も含む）では、子どもの成長とともに、「ひらがなやカタカナの学習をする」と「数や算数の学習をする」が増えており、「子どもと一緒に遊ぶ」と「絵本や本の読み聞かせをする」は減っている。これらはいずれも子どもの成長発達に対応した変化であると思われる。

● 母親の就業状況別の分析から

わかること

母親の就業状況別の分析とは、母親を専業主婦、パートやフリー、常勤に分けて、それらの違いを分析することである。

第1節の家庭でのしつけや教育方針では、興味深いことが明らかになった。それは、専業主婦の母親は子どもの生活習慣の形成（たとえば、「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけしている」）を、パートやフリーの母親は子どもの自立（たとえば、「一人でできることは、できるだけ自分でさせるようにしている」）を、常勤の母親は温かい家庭作り（たとえば、「家族と一緒に食事をするようにしている」）を、しつけや教育方針として、それぞれ重視していることである。各々の母親は、きわめて状況に適応したしつけを重視しているように思われる。

第2節の日ごろの子どものかかわりやその中で感じていることでは、働いている母親（パートやフリー、常勤の母親）ほど、子どもの成長や自分の成長を感じやすく、反対に、子どもに対するイライラ、感情的な叱り、他の子どもと比べた落ち込みといった育児に対する否定的な行動や感情は少なかった。母親の育児にとって、配偶者（夫）の理解や協力はとても重要であるが（p.22 図1-1-8参照）、この結果は専業主婦の母親の場合には、そうした理解や協力がとくに必要であることを物語っている。